No. 115

ティー・ブレイク

# Tea Break

## 幸せを運ぶ白い鳥

APAA で紹介された弁理士に「地元企業を紹介するよ」と言われ，冬のフィンランドに行くことになった。フィンランドと言えばトナカイ，サンタクロース，そしてムーミンであるが，そんなことはさておき，北方にある寒い国であることだけは確かである。

首都のヘルシンキはフィンランド南端のバルト海沿岸部に位置しているが，寒いことに変わりは無い。だから，大都市でありながらにして，ホームレスは居ない。この極寒の地では，ホームレスになることは死を意味するので，まずは住まいを確保せんがために一生懸命働くらしい。

むろん，男女差別も無い。「無論」と言ったのは，日本だって男尊女卑があるのは，主に南部の地域である。北の寒い地方では，男と女が互いに協力し合っていかねば生きていけないので，必然的に男女平等の精神が根付く。実際に，ターザンやアラビアンナイトのように，男というのが野生的で逞しい（そして，「たまに」優しい）ことを描写の中心に添えているのは，南方の国の物語である。

北方の国では，先の「ムーミン」のように，夫ないし父というのは概して穏やかで，家族がほのぼのと協力し合って生きていく様子を描いたものが多いのである。

そうした彼らは，サウナを好み，多くの家にはそれが設置されている。サウナで体を温め，その火照った体で外（雪原）に出て，雪の上にバタッと転がって体を冷やす，といった様子をテレビや何かで見たことがある方も居るであろう。

現に，彼らはそのようにサウナの後に雪の上に転がったり，氷水の中に入ったり，ということをしているらしいが，驚くべきことに，それによって心臓発作で死ぬ確率は著しく低いらしい。

で，私が訪ねたフィンランド弁理士であるが，「別荘に行ってサウナに入ろう」と言うので，のこのことついていったら，バルト海沿岸の別荘に案内された。バルト海というのは，外海でありながら，大量の雪と川からの流水により塩分濃度が低く，凍りやすい。実際に，そこには厚い氷が張っていた。

そして，ふと気がつくと，彼は小屋から斧を持ってきて，一生懸命に氷を割っている。直径 1.5 メートルくらいの穴を掘りたいらしく，必死に氷に向かって刃を叩きつけるが，氷は厚く，なかなか穴は開かない。大の男が３人がかりで小一時間，ようやく海面が現れた。中には細かい氷が浮いており，明らかに 0℃以下である。

そうして彼は，「この中に入る」と言う。私は「え゛っ？！」。信じられなかった。

けれども，別荘の中で彼は服を脱いでいく。そして「フィンランド人は皆やるのだから大丈夫。君も早く服を脱げ」と言う。恐る恐る服を脱ぎながら，私は実は「その瞬間」に至るまで，彼が「でも，君は外国人だから，やらなくていいよ」と言ってくれると思っていた。

しかし，氷の上を実際に走るというのは，それはそれは「冷たい」ものである。冷たさで痛くなった足を前に出すのだが，うまく走れない。途中で滑って転ぶ。すると，裸体に直接雪が当たって全身に冷たさと痛みが走り，転んだ痛みは感じない。

そしてついにダイビング。これは冷たい。タイタニックで海に投げ出された人がすぐに凍死するわけである。それから直ぐにあがってサウナ小屋に行くまでの過程は，よく憶えていない。

ところで，こんなに寒いところに，なぜわざわざ冬に行ったのかというと，それは「根性を見せるため」である。夏に行ったのでは，単に避暑ないしは観光のついでに行ったことにしかならない。皆が避ける極寒期にあえて行ってこそ，営業の効果があるのではないかと思ったのである。

そして，問題のプレゼンの日，地元企業の方々がそろったところで，例の彼が我々を紹介したときに最初にスクリーンに映し出されたのは，素っ裸で氷水に浸かっている私の写真であった。

思わず客席から感嘆の声が上がり，不思議なことに，雰囲気のほうはやわらかくなった。実は，あとで彼らに聞くと，「氷水ダイビング」はフィンランド人でもやらない人が多いと言う。そして，「外国人なのに，よくやった」，「勇敢だ」ということで肩をたたかれ，歓迎された。

そして，よくよく考えてみれば，根性を見せるところが，根性を試され，彼の誘導にそのまま乗る形で，結果的に，自分の未来を自ら切り開くことになった。今回の我々の“意図”をきちんと分かった上での「演出」であろうが，それにしても，うまいものだ。「相手の望むもの＋α」というサービスの真髄を見，体験し，ほとほと感心させられた。

きっと日本でも，サウナに入るたびに思い出すことであろう。（正）